

「昔はそんなに暮らしも悪くはなかった」

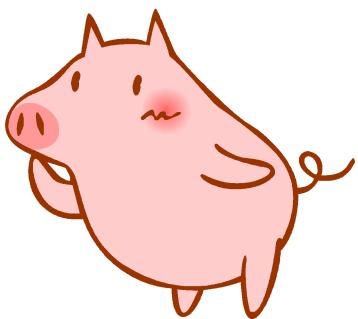
つてのは體験を迎えた五助の口癖だ。それから五助は必ず肩を見上げてため息をついた。

一揆は突然白水峠を越えてやってきた。一揆勢は村の脇を通って浜沿いに向かった。嵐のような一揆勢が通り過ぎていやら、このあたりの若い者も随分と一揆に加わって博多に行ったりして。

まだ若かった五助は一歳になつたばかりのせがれとお腹の大きなかみさんを押し入れに隠して、じつと一揆が過ぎるのを待っていたという。

「あの一揆は疫病神みたいなもんだったな。あれから暮らしづらひびくなつた。」

一揆がどういうものだったか、今の五助は何も言わない。ただ、解放令が出て、えた身分の者も平民に入れられ、これからは町の店にも堂々と行けるし、銭湯にも行ける。そう思つたんだが、あの一揆のあとは誰もそんなんうじには言わんやつたね。元よりも悪うなつた。それが五助の維新後の世間についての見方だった。



わたしは明治三十一年に生まれた。生まれたときからいつも隣近所も貧乏だったし、家はもう朽ちかけていた。

「読み書きだけはやれるようにしておけよ」

と、じこわらんが言うので、学校にはわらんと通つた。

でも、学校はちつとも樂しきはなかつた。いつも仲間はずれだったからだ。教室でも、運動場でも、まるでわたしたちマラの子どもなんかないかのように、みんな勉強したり、遊んだりしていた。誰も相手をしてくれなかつた。

それだけじゃない。あるとき井戸水で足を洗おうとしたら、

「バカヤロー、えたは最後だ」

といなられて、順番を取られた上に泥水を枯れられたことがある。

先生に注意してもうおうと見まわしたら、先生はすぐそばで見て笑つていて。

そんなことばかりなので、辛くて学校に行かなくなる子もいたし、はじめから学校に行かない子もいた。

わたしの住んでいたマラは周りの町からは見捨てられたように時代から取り残されていたんだ。家は建て替えられるしかも、修理されることがなく、御維新の前から変わらず、いや時が経つにつれてみすぼらしくなってきたようだつた。

建物だけじゃない。時代が変わって、藩に皮を納めていたような昔からの仕事はなくなつた。新しい安定した仕事にはマラの人間は就かせてはもらえなかつた。マラの中には地主様もおつたけど、取り残されていることでは同じだつた。マラ全体が世間から仲間にされていたようなものだ。

わたしが尋常科二年生になつた時に吉田といふ先生が赴任してきた。吉田先生は放課後になるとマリにやつて来てあちこちの家を訪ねてはなにやら話し込んでいた。

「新しく夜学会の担当になつたりし」

あんちやんが教えてくれた。夜学会は三年ほど前からマリの寺の本堂に学校の先生がやつて来て、マリのあんちやんたちに修身じだの読み書きだのを教えてくれるものだ。吉田先生は退職した花田先生の代わりにその仕事をあることになつたといつことだつた。夜学会は稻の刈り取りが終わつてからしかはじまらないのだから、先生は夜学会だけではなく、わたしたちのマリを変えようとマリのおもだつた人たちと話しあひを重ねていたのだつた。

ある日、マリの小学生が集められて先生から話を聞かされた。

「今までも君たちのお兄さんたちのために夜学会をやつて来たのは知つてゐるね。夜学会はこれからは積善会と名前を変えてマリの人みんなが参加するようにしたいんだ。夜学会に来ていたお兄さんは青年会、君たち小学生は幼年会、おねえさんたちは娘会、おとうさんたちは中年会、おかあさんたちは妻の会、そして老人会だ。」

「大人も子供も、みんな勉強するんですか。」

「女でも勉強するんですか。」

「やうだよ。たくさんの知識を学んで、新しい道徳も身につけていけば、社会の動きに遅れない。そうすればいいだけが取り残されるようなことはなくなる。今、君たちはむずかしい言葉で言えば、逆境に置かれている。逆境を押しのけていくためにはまず勉強することだ。そして生活を立て直していくこと。そうすればまわりの人たちも受け入れてくれ

るし、君たちの未来はきっと明るくなるよ。」

吉田先生のしたことは夜学会だけではなかった。まず、ムラから炭坑に働きに出ていった人たちに声をかけて寄付金を集め、夜学会場のための新しい建物を建てて、積善会場と名づけた。これでお寺を借りなくてもいつでも使えるし、空いているときはピンポンや将棋なんかも出来るようになった。本をならべてちょっとした図書館みたいな場所も設けた。おとなのための講演会や学習会も一一で開かれた。

先生はムラ全体で共同貯金をすることを勧め、目標を一万円にするように提案した。みんなは無理だと思ったみたいだけど、吉田先生の計算では、それぞれの家が毎日一時間早起きをして縄を編なわい、その売り上げを持ち寄って共同貯金に入れることで十年後には一万円になるということだった。そのほかにも各会が縄編いをしては共同貯金に入れたり、子どもたちが鶏を飼つて、その売り上げを貯金に入れる（貯金鶏）。とうちやんたち日雇い仕事で日銭を稼いだらその一割を貯金に回すなど、先生はいろいろな工夫をしていた。

それから、ムラに消防組を作ったり、生活改善のためのアイデアを集める田安箱を作ったり、種苗交換会や農産物の品評会をしてもっとといい農業ができるような取り組みをしたり、共同のみかん畑や苗代田を作ることや、肥料の共同購入など、ムラの生活をよくするための事業をいっぱい考えててくれた。ムラの人たちも吉田先生を信頼して、ずいぶんがんばった。

だけど、じいちゃんはそんなムラの人たちをさめた眼で見ていた。

「吉田先生は自分の手柄になるからあれこれ口うるさく言つけんが、人並みの生活ができるへりいの給金がもうえる仕

事をまわしてほしか。そっちが先じやあなかひつか。わあわあ縄縋りしたといひで、多少いじめられた服を着たといひで、町の人たちがわしりを見る目が変わるわけでもないだらう」

あんちやんも黙つてた。

「それこ、だ。積善会とこのや前が氣にくわねえ。善を積むと書くじゃねえか。おれたちが善にことをしようがしませんが、それはお上に言われてやる」とじやねえよ。なんか余計なお世話をつて感じがすみません」



五年が過ぎた。吉田先生のおかげで町の中で最低だった納税の実績が「滞納者無し」になつたし、一万円貯金も予定よりもだいぶ早く目標に近づいた。早起きして縄を纏う姿はあちこちで見られるようになつたし、マリのふんじきもだいぶよくなつた。見た目では、マリの中は以前よりずっと活気ついたように思えた。

そして、吉田先生は教育会で表彰されたって聞いた。

わたしはなんとか尋常科を卒業したけど、高等科には行かないことにした。ちゃんととした働き口なんてなかつたから、家の手伝いをするしかない。もっと勉強はしたかったけど、学校では相変わらずいやなことをされたり、言われたり、

仲間にも入れてもうえない。マリの入間だからってひどい扱いをされたのにほもつ相手られないからね。それにわざかなお金だけど、貯金にまわすぶん生活は苦しくなっているんだって、母ちゃんがぼやいていた。狭い畳が広くなつたわけでもないし、きちんと給料をもらひべる仕事なんてマリの人は誰も就いていない。



— 当時の小学校は尋常科四年のあと高等科四年に進むようになつており、義務教育は尋常科四年までだった。明治四十年度から尋常科六年高等科一年となり、義務教育は六年に延長された。主人公はこのとき三年生なので、六年生まで義務教育を受けることになる。また、義務教育就学率は九十六%まで伸びてこなか、就学してこないうちもが数%である。

- 一 前の道德
- 二 いの頃の教育関係者の団体